本棚の隅の「愛蔵書」

『小日本主義：石橋湛山外交論集』

増田弘編

丸山　郁太郎[§]

この本に巡り合うことができたのは、大学時代の恩師である故池田一之教授 (政治経済学部) のおかげである。先生は、人生の大半を毎日新聞の記者として過ごされたことから非常に気骨のある人物で、毎週レポートを発表できないと厳しく叱るような方であった。そんな池田ゼミの門をたたき、教科書となった本がこれである。その当時「石橋湛山」と言って思い浮かべるのは、歴代の総理大臣の一人で、短命政権であったというくらいである。ジャーナリズム研究をするゼミなのに、なぜ湛山を研究対象とするのかよくわからなかったが、この本を読むことによって、そんな悩みはすぐに払拭された。湛山は、戦前領土拡張を謳う大日本主義と相反する「小日本主義」を唱え、戦時中の軍国主義風潮に立ち向かい、現代でも通用する資本主義経済 (ケインズ経済) を根本とした平和主義の必要性をその当時から論じていた立派なジャーナリストであった。例えば、軍国主義に端を発することになった満州事変に対する論説[1] の締めくくりはこうである。「満蒙[2] は、... わが国の欲するごとくにはならぬ。少なくとも感情的に支那全国民を敵に廻わし、引いて世界列国を敵に廻わし、なおわが国はこの取引に利益があろうか」と警鐘を鳴らしている。

湛山を特筆すべき点は、資本主義経済の重要性を説き、領土侵略には非を唱え、隣国と共存を望んだ “リベラリズム”。批判にとどまらず、時局を鑑み、建設的な政策を指し示し、日本がとる方向性を具体的に論じた “洞察力” と “政策力”。そして、このすべてが現代においても通用することを戦前から考えていたという “先見性” である。私はこの秀でた能力にセンセーショナルを受けたと同時に、自分の思想形成に影響を与えたと言っても過言ではない。

定年を迎えた池田先生の最終講義にたまたま縁があってもぐりこむことができた。演題は確か「木に竹を接ぐ[3] ことなかれ」であったと記憶している。ジャーナリストとしての信念と、これから明治大学を背負ってたつ先生方へメッセージを述べ、教壇を後にした。この信念は、湛山も先生も同様であることから、この本を見るたびに湛山のみならず、先生の面影も偲ばれる。

---

§ まるやま・いくたろう／図書館事務部図書館庶務課システム担当

[1] pp102-109「満蒙問題解決の根本方針如何 1931(昭 6) 年 10 月 10 日号 (東洋経済新報・社説)」

[2] 満洲と内蒙古の併称

[3] 不自然で筋が通らない、条理の通らないこと